

蒼穹の昴 154

浅田次郎著 (講談社文庫・各620円)

北京から遠く離れた辺鄙な田舎から突然、物語が始まる。

直隸省静海県梁家屯の梁文秀という青年は、競争率百倍の「郷試」を突破し、弱冠二十歳でめでたく「挙人」の栄誉を手にした。その勢いで、都にのぼり科擧の本試験に臨む。

同じ村には李春雲という貧しい農民の子がいる。亡くなった兄は梁文秀と幼なじみであった。少年の境遇に同情した梁文秀は、彼を上京するときの付添人に指名した。梁は本試験でも驚くほどの力を発揮し、やがて上級官僚として登用される。しかし、彼を待っていたのは思いもよらぬ運命である。

村の占い師の予言によると、李春雲もいずれ出世して紫禁城に入り、西太后の財宝を独り占めにするという。しかし、字も読めない李春雲は権力の中心に近づくのに、たった一つの方法しかない。無一文の少年はそこで一大決心す

とって、目が眩むような分量である。ところが、いざ読んでみると、つい夜更かししてしまうほど引き込まれてしまう。

物語の構成に目を凝らすと、その理由はおのずと明らかになる。まず、作品全体を統御する大きな枠組みがあり、その中に七つの章がそれぞれ独立したユニットとして組み込まれている。それぞれのユニットは一つのまとまった物語になっていながら、さらにいくつかの小さい物語に枝分かれしている。かといって、小さい物語はぼらばらになっていない。

歴史性と娯楽性を織りまぜた構成力

1スは同じ場所に到達する。そこは王権の中心であり、政治舞台の真っ只中である。西太后をはじめ、光緒帝、李鴻章、康有為、袁世凱などが次々に登場し、最後の王朝が落日のようにゆっくりと沈んでいく様子が、絢爛たる絵巻のように入り込められる。政治的に対立する梁文秀と李春雲の二人も、それぞれの立場で歴史の大事業に巻き込まれていく。

文庫本にして四冊、ページ数は千五百頁に及ぶ。忙しい現代人にとって、目が眩むような分量である。ところが、いざ読んでみると、つい夜更かししてしまうほど引き込まれてしまう。

の腐敗、列強の侵略、民衆生活の貧困化、およびそれに起因する農民の反乱も社会の安定を脅かしていた。入れ子形の物語はそうした入り込んだ関係がきちんと整理する、いわば抽斗の役割を果たしている。

同じ歴史小説でも、近代を扱うときには困難が多い。古代を題材にする場合、史料の欠乏という難しさと引き換えに、作家が想像力を発揮する余地も大きい。しかし、近代史は現代と地続きになっている。そのため、作家に残された語りの自由度も制限される。かとい

って、史実の細部に拘泥すると、歴史書になってしまう。浅田次郎は実在した歴史人物と、架空の人物の役割分担を通して、この問題を巧みに処理した。歴史の大事業を描くときには実在した人物を前面に据え、社会の動きや歴史の細部においては、架空の人物に活躍させる。かりに前者が小説における歴史性を保証したならば、物語の消費快楽は主に後者によって提供される。

物語に奥行きを持たせるため

に、カスチリョーネという人物を登場させた。宣教師として清に訪れ、宮廷画家をしながら、長年北京に滞在したカスチリョーネの後半生は不明な点が多い。それだけに史実と虚構をつなげるのに、打って付けの役となる。この人物の設定によって、乾隆帝を過去の歴史から清末という時代に引っ張り出すことができた。清末の没落ぶりが全盛期と鮮明な対照になったばかりでなく、世界史における中国の転落の理由も炙り出された。

浅田次郎は史実に依拠しながらも、歴史瑣末主義に陥ったり、先入観にとらわれたりすることをしない。そのことは、西太后の人物像を見ればわかる。これまで西太后といえば、悪女という紋切り型のイメージが定着している。権力に目が眩み、ライバルを排除するためにには手段を選ばない。しかし、この小説ではそのような類型化した西太后の姿はない。政治的な感覚が鋭敏で、人の心を見抜く力にも長けている。一方、生活を愛し、人並みの優しさや思いやりを持つ女性になっている。フィクションの世界とはいえ、この小説によって、西太后の人物像が見事にひっくり返された。

物語に奥行きを持たせるため